

ふみの会 ニュース

■発行 　ふみの会広報部
 ■発行日 　2005年6月18日
 ■連絡先 　藤川博樹
 　　　　　〒115-0045
 　　　　　北区赤羽1-48-3 ドミール藤203
 　　　　　tel03-52495797 fax03-3901-6090
 ■編集 　塚原、藤川、蒲原雅、佐藤、蒲原直

No.284

7月行事日程

■ ニュース編集

原稿はテキストにして下記へ
ワード文書も可

kamo@sun.email.ne.jp

エッセイ：5枚（2000字）

小説：10枚（4000字）目安

■ 7月16日（土）5：00

四ツ谷地域センター 11F

地下鉄丸の内線 新宿御苑下車

四ツ谷方面へ徒歩5分



ヌーメア博物館の先住民遺物（ニューカレドニア）2002年8月

◆玄関にテングチョウが乱舞する季節になった。今年は数が多く、仕事部屋に入ってきてガラス戸におびただしく停まり、ときおりばたばた羽をふるわせる。テングチョウはエノキのあるところに集まる習性があるらしいのだが、家の周囲にはそれらしい木はないのである。ひよっとすると、わが家にはある種のフェロモンが充満しているのかもしれない。なにしろカメラでもテントウムシでもぎよっとするような数が侵入してくるわけだから。都会育ちのひとがみたら卒倒するかも。ところで部屋の中には蝶の鱗粉が渦をまいてははずだし、特有の昆虫臭さもあるはずだがいっこうに気にならない。鈍感なのかアレルギーがないのか、よく判らないけれども。

◆NHK総合TV特別番組『日本のこれから「人口減少社会」』6月24日午後7時30分～10時放送、に長野県下條村が取り上げられる。番組終了間際の9時30分くらいに出てくる予定。ところで、この下條村の村長、伊藤喜平さんをお招きして講演会をひらく計画があるのだ。というのも、神奈川県下唯一となった相模原市と津久井4町の合併劇も大詰めを迎えていて、わたしの暮らす藤野町では7月10日に町長選をひかえ、事実上の最後の審判が下ろうとしている。そんななか、合併を拒否し自立の道を選んで、なおかつさまざまな施策により村の活性化に成功している自治体がある、と聞いてさっそく村長さんにコンタクトをとったわけである。

ちいさくとも工夫しだいで自立の道を歩める、ということができるだけ多くのひとに知ってもらいたいと思う。◆合併問題は財政の観点から語られることが多い。しかし、ことはそう簡単ではない。憲法のおおきな柱である地方自治の精神がゆらいでいる。国民主権も平和主義もどこかしら外堀が埋められた感があるなか、希望はわずかに地方にあったのに、地方自治の精神はいわば根こそぎにこの邦から消し去られようとしている。ハイテク社会は中央集権的國家体制に好都合だ。合併劇の闇は深い。(K)

おれたちの村

⑤

蒲原ユミ子

5 あそび神社で

「えいやっー！
バサッ。」

ヒロキの投げた草手裏剣がもろに陽平の顔に当たった。草といつても根ごとむしり取ったが、つぼり土つきである。

「なにくそっ」

陽平もまけじと土まみれの顔で草をむしり取って投げ返すが、どうもヒロキのようにうまくいかない。それもしかたがない。この遊びは陽平は初めてなのだから。

ここは神社の境内。すっかり雪も消え、どこもかしこも緑がいつせいにはりきつてあらわれている。山につづく岩間から清水も流れ出ていて、そこで小さな女の子たちがどうも団子を楽しそうに作っている。

陽平は頭も服も土だらけになってきた。けれど、いやではない。それどころか、気持ちいい。2年生ま

では学童に入っていたので、この男らしい遊びはできなかったのだ。

そのうち、だんだん陽平は草のむしり取りのこつがわかってきた。草のつけ根にぐわきつと五本指をつっこみ、ずくつとつかみ取る。草さえ取れたら、投げるのは陽平の得意とするところ。

いい勝負になってきた。すると、ヒロキは女の子の方へ走り、

「どろだんご、おくれ」

と、たのんだ。女の子はおしゃまな声で、

「いいわよ。でも、あたしたちのほうにはなげないでね」

といい、ピンポン玉くらいのだろだんごをさし出した。

ぐわつとつかむやいなや、ヒロキは笑いながら、追ってきた陽平に投げつける。陽平はすばやくよける。そして、陽平も女の子の所に走る。

「おれにもくれよ」

女の子は、

「しようがないわねえ」

と言いながらうれしそうに陽平にもどろだんごをわたす。陽平はヒロキをねらう。が、敵もさるもの、軽くかわす。そして、女の子たちに注文した。

「どろだんご、どんどんおかわり！」

小さな女の子たちははりきった。「もう、おとこのこつて、どうしてこうなの！」

「ようなの！」

陽平も3こまとめてもらってヒロキをねらう。

ビチャッ。

大きいのがヒロキのぼつ。たに命中した。

「ギエイ・・・」

ちよつとタイム」

目にどろが入ったのか、ヒロキが清水で顔を洗い始めた。

ほつと一息ついた陽平の目に、神

社の前の道を歩いていく森野泉の姿が入った。今年、1年生になった

妹の手を引いている。妹は泉に似ていなくて、かわいいふつうの女の子だ。

ハンカチなどないのか顔をぶるるとふるわせていたヒロキが、泉に気つき声をかけた。

「いつしよにどろ投げしないか？」

泉は立ち止まり土だらけの2人を見た。そして、いつしゅんうれしそうな顔をしたのに、

「ほく、ドロ、きらい」

と言い、ぶらぶら帰っていった。

(あいつメ・・・)と陽平はすぐくカチンときたけれど、妹の手を引いていく泉のうつむきかげんの後ろ姿がせつなく心に残ってしまった。泉のお父さんは東京にいたりとかで、母さんは遠い隣の大きな市まではたらきに行っているそうである。つまり、泉は陽平と同じ鍵っ子なのである。

ヒロキは泉にことわられたのも気にとめず、にやりと陽平に笑いか

けた。

「ようし、こんどこそ顔のどまん中
にあててやるぞ！」

しかし、陽平の戦とう意欲は急に
しぼんでしまっていた。

「わるいけど、おれ、ケントをつれ
に行かなくちゃあ」

そう。弟の健人も学童に入ってい
るのだ。母ちゃんに陽平も3年生ま
では健人といっしょに学童にいる
ように強く言われたのだ。けれど、
陽平は、必ず健人を学童にむかえに
行くこと、トイレそうじをすること
を条件にやつと学童を卒業させて
もらったのである。

陽平はどろだらけの顔や手、くつ
などを清水で洗うと、学校と同じ敷
地にある学童に重い足を向けた。

6 青大将

朝日の中、ランドセルをせおった陽
平が人気がない坂道を登っていく。ア
スファルトでなく石がごろごろしてい
るが、バス通りよりちよつと近道なの
だ。それに、こっちはお屋敷の前を通
るから犬のムサシにも会える。

坂を登りきつて左に折れようとし

た時、緑の木もれ日の中に、ピンクが
ゆれ動いた。よく見ると、桜田先生で
ある。先生は山際の細いあぜ道を歩
いている。たしかに、そちらの方が学
校に一番近い。あぜ道から山に登る
と、林をぬけてすぐ体育館のわきに
出るから。

陽平は、(スカートでよくあんなと
ころを歩くなあ)と思い、お屋敷道を
やめ、先生のあとをつけていった。桜
田先生はまわりを見ながらゆつくり
歩いていく。

ホーケケキョー
ケケツキョキョー
あふれる若葉の中で、ウグイスが舌
足らずに鳴いている。

たつぷり水の張られた田んぼには早
苗が根つき、分けつし始めている。畦
の山側には薄紫色の山紫陽花がかわ
いく咲いている。陽平は、桜田先生は
こういう静かできれいな自然が好き
なのかも知れないと思ひながら気が
つかれないように行っていた。

先生は用水になつている小さな湖の
縁を通つて山が上がった。林をつっき
ると、すぐ学校である。ところが、い
きなり、

ギヤアア

と、けたたましく先生がさけび、立
ちすくんだ。陽平は間をせばめた。
クルミの大木の盛り上がった根つこの
間に大きな青大将がとぐろを巻いて
いる。この山には蛇が多い。水も蛙も
たつぷりなせいだろう。陽平も同じ場
所でとぐろを巻いている青大将を見
かけたことがある。

青大将も桜田先生の大きな声にび
つくりしたのだろうか。とぐろをゆる
ゆるとき、ゆつくり茂みに入ってい
た。先生は蛇がいなくなったのを幸い
とばかり階段のようになつている根っ
こをとんとんと登り、とつとと林を
走つていった。なにしろ、もうすぐチ
ヤムが鳴るころである。

陽平もほつとして急いだ。そして、
林の中をぬけながらある作戦を思い
ついた。

放課後、校舎のうらで陽平が両手
いっぱい広げてヒロキと守に教えてい
る。

「これよりずっと長かったんだぜ。ぜつ
たいおれたちでつかませようよ。6年
生にもじまんできるぞ」

ヒロキは乗り気である。

「石とぼうがあればいいかな」

メガネをかけ小太りの守はしつこく
確かめている。

「そいつ、ママシではないのだな。ゼニ形
もようではなかったかい」

陽平は青大将とママシのくべつくら
い朝飯前である。この村よりもつと山
奥で生まれ育つた母ちゃん仕込みな
のだから。

「だいじょうぶだつてば。ママシは人に
向かつてくるけど、あいつは桜田先生
を見てにげたから。だいいち、ママシは
あんなに長くない」

ヒロキは自分たちほど運動神経がよ
くない守に言った。
「心配だったら、長くつをはいてくる
といいよ」

けれど、守としてはとても心配だ。
「湖の側でとぐろをまいてるなんて、
そいつ、湖の主じゃあないかな。主を
殺しちゃうとたたりがあるかもしれ
ないよ」 (つづく)

鬼子母神

蒲原直樹

現代日本の少子化がどういう原因で起きているのか、いろいろな説があるが、本当は簡単だ。女が貧しいのだ。今時の子どもは金がかかる。それも半端じゃなくかかる。ちゃんとした養育施設を使えば月に十万、二十万は軽かかるとそれに耐えられるだけの稼ぎとなると年収一千万クラスということになる。そんな母親はめつたにいない。もちろん男に稼ぎがあれば別だが、今時の女は男をあてにしない。いや、あてにできないと言うべきか。どんなにやれイクジナシだ男も育児休暇だとか騒いだって、男は結局、出産や育児は女がするものだと思っっているのだから。大多数の女がパートや派遣で年収百万からせいぜい二百万程度しかもらっていないのに、どうやって高い育児費用を払えるだろう。少子化は女たちの諦めの結果である。

混沌市行止(いきじまり)の団地に住む津川憲明はその女の容姿端麗さに驚いた。やもめ暮らしの乱雑を片付けても見えるのは有難いが、そんな汚い部屋を見せるのが辛く思えるほどその女は美しかった。規定の時間が過ぎ、料金を払う時になって彼は思い切つて話しかけた。「コーヒーでもいかがですか」女はうなずいた。

「いやあ、声をかけるのに勇気がいりました」

飲み終えたコーヒーセットを台所に運びながら津川は言った。

「中森さん、すごい美人だからなれてるんでしょね、男性に声かけられるの」

「いいえ、そんなことありません」

中森苑子は牡丹がほころぶような笑顔を見せた。質素な作業服に汚れたエプロンをし、化粧らしい化粧もしていないのに瞳の輝きは並外れ、プロボーシヨンの完璧さは信じられないほどだった。しかしその表情からは女が自分の美貌を自覚しているのか、それとも考えもしていないのか分からなかった。

「あなたくらいの美女だったら、こんな雑用仕事でなくてもっと……たとえ社長秘書なんという仕事が似合いそうですが、どうしてホームヘルパーを？」

「わたし、無能なんですよ」

女は捕らえどころのない応えをした。

「立ち入ったことを伺つて恐縮ですが、もちろんご結婚されてますよね？」

津川はもう一步踏み込んだ。女の薬指に指輪がないのは確認している。

「ええ………していたんですけど……去年別れました」

「それは、失礼しました」

驚いたような声を上げながら、内心彼は歓喜した。

「わたし、結婚生活にも無能だったみたいです。料理は下手だし不器用だし、おまけに愛想もないって言われるんです。こんなじや離婚されて当然ですよね。言いたくないけど」

「そんなばかな……」

津川は嬉しさに思わずほころびそうになる顔を抑えながら言った。

「月のうち三日しか帰れないという仕

事だったから、ぼくが離婚されたのは仕方なかったと思います。しかも残業代も出ないといういたらしくでね、自分でも愛想がつきました」

彼はコーヒーメイカーのフラスコを流しに置いて女のもとへ戻ってきた。

「でも、あなたは違う。あなたはほとんど女神だ、あなたに料理や家事をさせようとする男がいるなんて、それこそ馬鹿の骨頂だ。ぼくなら絹のドレスを着せて水仕事も力仕事もさせませんね」

「ほんとうですか？」

女は芝居ではなく本当に驚いたようだった。そして真剣な顔をした。

「そんなこと言われたのは初めてです。嬉しい……」

津川憲明が中森苑子とつきあうようになって三ヶ月過ぎた。津川にとつては夢のような日々だった。苑子は驚くほど積極的な女で、あの日以来津川の部屋に通い詰めている。たしかに料理は下手だったが愛想がないわけではなかった。それどころか話好きで楽しくユーモラス

で、しかもエロティックな女だった。二人がいつしよにいるのはほとんどベツドの上で、シャワーもバスもいつしよに入った。

気になることが少しあった。苑子は自分の部屋に彼を呼ぼうとしなかった。電話も携帯のナンバーは教えてくれたが自宅には教えなかった。そして彼が「結婚しよう」と言っても「まだ早いわ」と言って首を縦には振らなかった。

その日、珍しく苑子から職場に電話があつて津川は早めに帰宅して彼女を待った。玄関のチャイムが鳴り、ドアを開けた津川は苑子の腕の中のものを見てびつくりした。

「あなたの子どもよ」
言われて津川は二度びつくりだった。苑子が抱いていたのは生後三ヶ月くらいの赤ん坊だった。この子が生まれた頃には、自分はまた女に会ってもいなかった。

「落ち着いてくれ、ぼくらはまた会ったばかりだよ、セックスはしたけど、妊娠して出産するまでには十ヶ月はかかる。そんな時間はなかったはずだ」

「わたしはそういう体質なの」
「そんな体質がどこにある、冗談もいいかげんにしてくれ」

「わかったわ、あなたってそんな無責任な人だったのね。男ってみんなそう、いざとなったら責任のがれしようとするんだから……」

「ちよつと待て、ぼくは君と結婚したいと思つているんだ、その子がだれの子どもでもない、父親になるよ、だけどそれとこれとは違う話だろう？」

「いいえ違います、この子はあなたとわたしの子どもです。あなたが責任もつて育ててください」

女は赤ん坊を津川に押し付けた。そしてくるりと背中を向け、足早にエレベータ室へ歩き去った。津川はあつけにとられ、女を追いかけることも出来なかった。

津川憲明はそれからしばらく赤ん坊の世話に追われた。会社にも出られず、隣の杉戸市に住む妹を呼んでミルクの世話をさせ、自分は紙オムツを一山買出ししたりした。また一方で中森苑子の行方を探すこともしなければならなかった。彼女はどこにも見つからなかった。

携帯電話は解約されており、ホームヘルパーの派遣元に連絡してもとつとくに辞めたといわれた。津川はしかたなく警察に届け出た。

「ああ、この女ですね」
話を聞いてやって来た担当刑事は数枚の写真を出し、津川がその中にちよつ

と若くちよつと暗い苑子の肖像を認めてそれを示すと、刑事は苦笑いしながら言った。

「嬰兒略取の常習犯ですよ。頭がおかしいんで何度起訴したって裁判官は無罪にしちまうんです。またやったんだ、あいつ……どっかで事件になつていないか、ちよつと調べて見ますね」

刑事はファイルをバラバラとめくり、すぐに一つを見つけた。

「杉戸中央病院産婦人科から乳児が消えたという届けがあります。きつとこれでしょう、すぐ連絡します」

「あ、その前に」
津川は、早くも電話機を掴み上げた刑事を制止した。

「中森苑子の住所を教えてくださいませんか、どうせ転居してらんでしょうが、最新のだけでも」

混沌市迷路小路の小さなアパートに行ってみると、そこに中森苑子がいた。犯罪を犯しながら逃げもしないというのはやはりまともじゃない、津川はそう思った。しかし目の前に呆然と立っている女のまぶしいほどの美しさを見ると、まともだったら自分のような男はどうしても出て来ないだろう、とも思った。

「赤ん坊はどうしてる？」苑子は言った。

「元氣だ、でももううちにはいない、警察が保護している」

「せつかくあなたにあげたのに……」
苑子はキツチンの椅子にくつたり腰掛けた。

「ぼくに子どもなんか必要ない、君にもだ。ぼくは君だけで充分だよ。それをわかつてほしいね」

「わたしはわたしの子どもを殺したの」
苑子の言葉に津川は沈黙した。

「最初の彼氏の子ども、出来たときはわたしは中学二年だった。そのときの掻爬で妊娠できない体になつてしまった。神様は無慈悲だったわね」

「辛い経験だったろうね」
「わたしは鬼子母神よ」
「鬼子母神……それは違うよ、すくなくとも君は、さらつた子どもたちを食べべなかつた」

「食べたかつたのよ、でも、わたし偏食なの」

その後、二人は何度か会うことがあつたが結局は結ばれなかった。男はやがて他の女と再婚し、女は混沌市迷路小路に住んで今も嬰兒略取を繰り返している。

白馬岳 (一)

中井 豊

なり手の少ない高松山岳部の顧問になって、初めて登った山が白馬(しろま)岳であった。二〇年ほど前、私は三五歳だった。生徒は四人が参加した。

それまで私の経験した高山は伯耆大山、木曾駒ヶ岳くらいで、それも数学の仲間と勉強会のレクリエーションとして登ったのだった。いずれも一〇時間以上の日帰りの強行軍だった。他に経験ある顧問が二人いたから、まあ大丈夫だろうと考えた。ドイツのハンヴァグ製の登山靴だけ新調した。

大阪からJR大糸線の白馬駅まで、名古屋―信濃大町経由、富山―糸魚川経由の二通りの行き方がある。糸魚川から入る場合、何故か南小谷駅で乗り換える。私達は往復とも糸魚川を通ったように思う。

初日は白馬尻のテント場で、二日目は白馬頂上直下のテント場で、三日目は朝日岳の下のテント場で、それぞれ暮営し、四日目は夜間急行「立山」の車中で泊まった。

案内されて旅行すると、乗物や路線など人まかせになるもので、どこをどう動いたのか、歩いたところ以外は後で思い出せないものだ。信州の地理について、

この時はよく判らないまま登った。

JR白馬(はくば)駅からタクシーで猿倉(二三〇m)に入り、そこから白馬尻まで右手に沢を見ながら林道を歩く。高度のため、既に涼しく感じる。登山口に到着してしばらく登ると村宮白馬尻荘と白馬尻小屋とが並ぶ場所に出る。小屋の手前を右に折れて冷たい沢を渡るとテント場だった。

翌朝は上天気だった。薄暗いうちに食事を済ませてテントを撤収し、出発。少し登った地点でアイゼンを着け、大雪渓に入った。

白馬岳(二九三二m)は、北アルプスでも北端に聳える名峰である。東側が切れ落ちていて、その形は後立山連峰からも見分けやすい。この山は豪雪地帯にあるため、真夏でも大きな雪渓が残り、水が豊富で高山植物に恵まれている。

雪渓はアイゼンを着けて登る。また、大雪渓へは落石が多い。大雪渓を歩く二、三時間は、始めのうちこそ珍しいが、変化の乏しい雪の上を直登するせいか、次第に倦怠を感じさせられる。

葱平(ねぶかつぴら)を過ぎ、小雪渓を恐る恐るトラバースすると、間もなく

村宮頂上宿舎が見えて来る。この辺りで標高二五〇〇mとなり、美事なお花畑が広がる。しかし、空気が薄くなり、足が空回りするような感じになる。葱平から二時間あまりで村宮頂上宿舎に着く。テント場は宿舎裏側の窪地にある。

テント場はとりどりの色や形のテントで賑わっていた。見上げると、不安定に見える大岩が今にも落ちて来そうだった。その下でシュラフ・カヴァーだけで寝ようという中年の豪傑がいた。

テントを張っておいて、空身で頂上を往復した。西側に坐る旭岳(二九〇〇m)の量感に新鮮な感動を抱いた。また、反対側の丸山(二七六八m)の少し先まで往復した。杓子岳や白馬鍾ヶ岳が見えた筈だが、経験が乏しかったので、この時は心に残らなかったのである。

夜は星がよく見えた。芥川の『杜子春』に「星が茶碗くらいの大ききに見えた」という表現があったように思う。そんな印象の見え方で、しかも「星の数ほど」星が見えた。

三日目は三国境―鉢ヶ岳―雪倉岳―赤男山を経て朝日平キャンプ場を目指した。生徒は二五kgくらいのザックを背負って走るように進む。こちらのザックは一五kgくらいだったと思うが、新しい登山靴が踵の皮を食い破っていた。

鉢ヶ岳や赤男山は確認できたのかどうか思い出せない。暑い日射しの中で、延々と続く「白馬水平道」の水平でないことを皆でぼやいたことは憶えている。朝日岳の頂上から離れたテント場では、西日を浴びる朝日小屋で楽しそうに寛ぐ人達が眺められた。

四日目は、まず一時間ほどかけて朝日岳(二四一八m)に登頂し、白高地―五輪尾根―カモシカ坂―兵馬平―アヤマ平―蓮華温泉―平岩という行程だった。蓮華温泉から平岩へはバスだった。

この日は、尾根へ登っては下った。この繰り返しには参った。それでも、下ると沢があつて、清冽な水が勢いよく流れていて安らぎを覚えた。

ヘトヘトになり、カモシカ坂の登りでは、三〇分も歩くと「待ってくれ。休もう」と言つて、生徒に呆れられたことも初心者時代の懐かしい思い出である。

兵馬平からは湿原にしつらえられた木道を歩く。水芭蕉の花も咲き残っていたと思う。出発してから八時間ほどで蓮華温泉(二五〇〇m)に着く。

蓮華温泉は白馬蓮華温泉ロジジから坂を登ると、地面に「温泉穴」があちこちに掘られている。脱いだ衣類は辺りに置く。霧雨が静かに降る中、文字通り天然の温泉の一つに浸っていると、疲れ切った身体に愉快な気分が拡がって来た。

遙かなる戦火

内田幸彦

(五) とんだ置き土産

一九四二年、ミッドウェイ海戦で、空母4、巡洋艦322機を失い、戦局は日本の劣勢に転じた。ガダルカナル島、ニューギニアで日本軍は玉砕した。政府も国民も一抹の不安を感じずにはいられなくなつたのは、この頃からだった。

そこで政府が打った手は「戦時学徒動員令」である。工場に、農村に少しでも労力を補いたかつたのである。兵隊は、現役兵は全部招集し、予備役の在郷軍人ですら払底してしまつた。工場へ廻す人手といえは若い純真な学徒よりいなかつたのである。

英語は敵国語だからと廃止になり、学問を放つて工場へ行った。勉強嫌いの学生、生徒達は手を叩いて喜んだ。というのは、一日360gの食糧では常に空腹だった所へ、軍需工場へ行けば昼の給食が出る上に、軍需工場用の特配物資が貰えたからである。食糧、衣料、酒、砂糖など、当時としては金では買えぬ時代だった。

或る日、工場給食を済ませ、工場に戻

ろうとすると、太田、横井の二人が私を呼び止めた。

「面白いものを見せてやるから、ついて来いよ。」

就業時間まで間のある私は、興味も手伝つて、言われる儘、青年寮について行つた。

三十畳もある板間の集会所に行くと、下級生が十名近く待つていた。不安と恐怖に満ちた敵意のある目がリンチを予感させた。太田は悠々と云つた。

「今日、何故呼ばれたかは判るな？ 貴様らの態度が悪いんだ。生意気で上級生をなめてる。今日は一度性根を叩き直してやるから吾らの鉄拳を受けて見ろ！」

太田も横井も2m近い大男だ。横井が、「性根を据えて受けて見ろ！」

と、足を開き身体の安定を保ち、身体に反動をつけて殴ると、「ビシッ」という、肉感的な厳しい音と共に、下級生は壁の腰板に当たつて倒れる。小さい下級生は宙を飛んで倒れる。まるで西部活劇そのものだった。

「交替！」

と横井が言うと、交替した太田は倒れた下級生達を整理させ、

「手を腰に取り、足を開けッ！ 倒れるな、しっかり立つてろッ！」

言うが早い、真向から男子の急所を蹴り上げて行く。「ウーン」と倒れた儘、立ち上がれず、のたうちまわり、まるで地獄絵そのもの。何の気なしに付き合つたものの、私も余りの残酷さに気分が悪くなる程、凄まじかつた。

翌朝、出勤すると担任の先生と殴られた下級生と父兄十余人が正門で私を待つていた。《昨日のリンチだッ》とピンと来た。

「内田、ちよつと来い。昨日は何をしてくれた？ 父兄達が警察に訴えると意気まいていぞッ。」

何時もは優しい先生の目も怒りに震えていた。

事実通り、私は「誘われて見ていただけだ」と言つたが、聞き入れられなかった。何とかして警察だけはこらえてくれるよう、先生は父兄に懇願してくれ、その代わり学校の処分は必ずすると確約した。父兄の怒りは和らぎ、私は専門学校への入学を三ヶ月間延期され、工場通いを続けた。

このリンチは、太田、横井の置き土産だった。太田は陸軍特別幹部候補生に、横井は海軍甲種飛行予科練習生へ、出征前日の置き土産だったのだ。

現代なら大変な事で、新聞種になり、実刑を喰らうかも知れないが、戦争中というのは好戦的な気分が満ちているし、上級・下級の序列は厳しく守られていたから、これが普通の状態だった。このように、リンチは「タコを釣る」と称して日常茶飯事に行われる時代だった。

馬鹿を見たのは私で、出征の置き土産とは露知らず、のこのこ従って行き、一人で尻拭いさせられた。それにしてもあの凄まじさは今も網膜に残り、忘れられない。太田、横井にしても生きて帰される保証はない。不安への憂き晴らしたつたのかも知れない。

あのリンチは残酷というより、凄惨だった。不謹慎かも知れないが、《あれでよく下級生が死ななかつたものだ。人間って意外に強いものだなあ》と感心した憶えが残っている。

戦争は人を悪魔にも獣にもする。二度とあつてはならないが、弱肉強食の世は永久に変わることはないのでは？

ヒカル君の冒険 3

藤川博樹

ヒカル君は「こ」を食べる

二歳になったヒカル君は、好奇心旺盛で家中を探検して回った。目につくものはすべて珍しく、手で触り、口に入れて、その感触を確かめずにはいられなかった。

お父さんは、そのころまだ禁煙していなくて、灰皿の中はタバコの吸殻でいつもいっぱいだった。陶器でできた灰皿はきれいな薄緑色をしていて、いつもお父さんの手元にあり、大切なものに見えた。二〇センチぐらいの直径の灰皿の中心部は吸殻が一杯に刺さっていて、まわりの

シルクハットのつばの部分に短くなつた吸殻がぐるりと並んでいた。お父さんは、タバコが切れると、並んだ吸殻からよさそうなのを選んで吸っていた。

お父さんは、いつも西側の二畳の居間にあちやぶ台に座つてたばこを吸っていた。ヒカル君は、お父さんが席を離れたすきに、シルクハットにならんだ白い棒状の吸殻を全部食べてしまった。お父さんがいつももうまそうに吸っているので、おいしいものだと思つたのだ。

お父さんが席に戻つてきて、しばらくしてヒカル君の様子がおかしいのに気がついた。顔を青くして、座り込みうーうーうなつていたからである。灰皿を見ると、灰皿のつばに並んだ吸殻が全部なくなつていた。あわてたお父さんは、半袖シャツにステテコのまま、ヒカル君を抱えて庭に飛び出した。サンダルを突っかけて、ヒカル君を抱えて走つた。ヒカル君はお父さんの腕の中で真青な顔をしていた。

お父さんは、家の前の野原を抜け、林を抜け、住宅街の中を抜け

て駆けた。ヒカル君の顔を見ると、青く血の気がない。ヒカル君はぐったりしている。

駅前の佐々木医院の扉をたたいたが留守で出て来ない。お父さんは、線路の向こうに産院があることを思い出し、神でも仏でも、なんでもいいからすがるつもりで走つた。京浜東北線の線路をわたつて、線路際にある産院の戸を叩くと、産院の先生が診察をしてくれ、ヒカル君にお茶を飲ませた。

ヒカル君はとても気分が悪そうなお顔をしていたが、洗面器いっぱい胃の中を吐き出して、その中にはたくさんの吸殻のかすがまじつていた。先生はわらつて、これだけ吐けば大丈夫でしょうと言つた。

ヒカル君は吐いてすつきりしたよううで、機嫌もよくなつてきた。お父さんはやつとおちついて気分が家に帰つた。

お父さんはお母さんから、その夜、ヒカル君がうんちしたときに、タバコの吸殻のかすがいっぱいまじつていたと聞いた。

お父さんは、お母さんからきつ

く言われて、タバコの吸殻をヒカル君の手の届かないところに片づけるようになった。

